

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.42 (2020年7月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付

<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>

E-mail: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第74回定例研究会記録】

オンライン座談会

「コロナ禍における沖縄の年中行事と民俗芸能」

日時：2020年6月28日(日) 13:30~15:00

オンライン開催 (Web 会議ツール Zoom)

司会 おがわ けいすけ
小川 恵祐

対談者 なかなだかり しんじ
仲村 渠 辰治 (非会員)

(沖縄県青年団協議会/読谷村出身)

かみや たけふみ
神谷 武史 (非会員)

(沖縄県立芸術大学講師/

八重瀬町志多伯獅子舞棒術保存会)

COVID-19 (新型コロナウイルス) の蔓延による生活様式の変更は学界においても例外ではなく、支部活動の中心となる定例研究会においても、その開催方法を根本的に見直す必要に迫られた。他方、感染拡大防止対策として、様々な行事とそれに伴う芸能も活動自粛を余儀なくされるニュースを日々目の当たりにする中で、祭りのシーズンを目前に控えた沖縄各地の民俗芸能の実践者の状況や思いを、我々研究者も共有する機会が設けられないかと考えた。このような経緯から、第74回定例研究会は「コロナ禍における沖縄の年中行事と民俗芸能」と題し、沖縄本島よりゲストスピーカーを二人招聘してオンラインシステムを用いた座談会を開催するに至った。

オンライン開催にあたり、冒頭画面や口頭で、発言

者以外のマイクはミュート設定にする等の注意を促したこともあり、滞りなく進行できた。また、通常の沖縄支部定例研究会では参加者は基本的に県内在住者に限られるが、今回は東西日本支部あるいは県内離島など広域からの参加希望があり、オンライン開催の利点を再認識した。その一方、やはりインターネット環境は各々で事情が異なるため、視聴が適わない会員に対してどのようなフォローが必要か課題も残った。そのため以下では、座談会の様子を少しでも感じていただけるよう、対談形式で掲載する。ただし紙面の都合上、表現をできるだけ維持しながらも、構成や言い回しを大幅に修正した。ご了承願いたい。

日常生活でさえこれまで通りとはいかないような多忙の折にも関わらず、本定例会の趣旨へのご理解とご協力、そして多くの示唆を与えてくださった、ゲストスピーカーの仲村渠辰治氏と神谷武史氏に、この場を借りてあらためて感謝申し上げる。

■座談会記録

小川：簡単な自己紹介から。

神谷：地元の八重瀬町志多伯には獅子しし加那志がなしという神獅子が存在し、その獅子は33年間に6回の節目でしか行われぬ豊年祭で踊られる。高校1年生の頃にその豊年祭に出演したことが転機となり、芸能の道に進んだ。22年ほど前の沖縄県立芸術大学在学中に、東風平町(現八

重瀬町)の教育委員会が地元の中学校に郷土の芸能を学ぶ総合学習科目を設置し、学生時代から非常勤講師として指導を行なってきた。また、20年間役場職員として行政に携わった経験を生かし、現在は沖芸大沖縄文化コースの講師として、地域と芸術を結ぶ文化行政や地域での芸能活動の企画や制作などを学生に伝えている。幼少期より続けてきた空手と踊りをミックスさせた創作舞踊などで舞台活動も行っており、これまでの様々な経験を現在の仕事と結びつけながら活動している。

仲村渠：私が青年会の活動を始めたのは二十歳の頃で、青年会はエイサーだけではなく地域住民との交流コミュニティが重要と考え、活動を続けている。また、全国の青年団とも交流を続けており、昨年度からは沖縄県の青年団の活動について全国で講演している。

小川：仲村渠さんは中部あるいは読谷村の横断的な青年会のネットワークのトップとして長く活躍し、現在は沖縄県青年団協議会(以下「沖青協」と略称)の会長を務めている。昨年は『結成70周年記念誌』も完成された。

仲村渠：沖青協が結成された当時、戦後の焼け野原の状態から地域の青年会が発足していく中での中央組織としての役割を担っていた。結成70周年という機会に行った、我々現役世代がその歴史を学ぶ集大成としての取り組みだ。沖縄には独特の文化があり、それと青年会がどのように関わってきたのか。青年会はただのエイサー団体でも地域を盛り上げるための会でもなく、その地域で生きていく誰にも与えられた権限を活かして地域を作っている団体だ。青年会活動は、学校を卒業した後に社会活動を通して学ぶ場で、大人が成長し、より良い社会作りに貢献できる場だと考えている。

小川：もちろん、エイサーは県の青年会の重要な活動のひとつでもある。仲村渠会長から紹介いただいたYouTubeの動画を観てみたい。

(映像：【okinawaBBtv】第52回 沖縄青年ふるさとエイサー祭り(北谷町) <https://youtu.be/zeyAN4xioWc>)

仲村渠：沖青協が開催している沖縄青年ふるさとエイ

サー祭りの特徴は、沖縄市で開催している全島エイサー祭りとは異なり、エイサーのみならず芸能部門もあること。青年会が日頃地域で活動している地元の芸能を披露する場だ。今年はコロナの影響で各エイサー祭りが開催できない。青年会が一堂に会する場が少しずつなくなっていく状況に、何か手を打ちたいと考えている。

小川：このコロナ感染症の状況で、エイサーに限らず仲村渠さん自身が困っていることは。

仲村渠：多くの人数を集めることができず困っている。オンラインでできないか模索しているところではあるが、まだ抵抗がある人もいて、なかなかスムーズにいかない。

小川：そろそろ旧盆の季節で青年会ではエイサーなどの練習が始まると思うが、どのような状況か。例えば練習場として公民館を使うのも難しい状況なのか。

仲村渠：地域によって違うが、市町村の祭りはほぼ中止が決まっている。せめて旧暦のお盆に行く道ジュネー(練り行列)などができないか地域と交渉するところもあれば、すでにエイサー練習を開始したところもある。今把握している限りでは3市町村ほどが練習を開始しているが、地域によっては公民館のガイドラインを作成してからでないと活動できないところもあり、その作成に時間がかかっている。青年会も毎年世代の入れ替わりがあるので、今年一年活動ができなかった場合に今後どのような影響がでるのか、危惧している。

小川：神谷さんの出身地である八重瀬町の芸能は、現在どのような状況か。

神谷：旧暦6月に入ると綱引き、7月はエイサーと行事がやってくる中で、地域の皆さんが一番心配しているのは、綱を作る準備やエイサー練習などに取りかかれないこと。また、今年から青年会や保存会に加わる若い人たちが貴重な初舞台を奪われており、スタートラインにすら立てない状況は、今後も長く続いていくであろう芸能にとって大きな損傷とならないかととても不安だ。そういったこともあり、4月

の字の総会では、本来は限られた年の8月15日にしか出せない神獅子を出した。出す前には字の評議員に諮り、また古老にも相談した。我々の獅子が演舞をする目的は悪疫退散である。獅子を舞うことを生み出した先人たちは、やはり最悪の状態を迎えてそこに行き着いたのか、もしくは悪疫が蔓延し始めた頃に獅子を舞わずで皆が心をひとつにしたり、共同体が繋がる手段としてこの芸能を生み出したのではないかなど、いろんな意見が飛び交った。獅子に入る青年たちにも職場や家族がおり、やはり獅子舞を今やることは社会的に批判を浴びるんじゃないかという不安の声もあった。いろんな不安を払拭しながら取り組むために、獅子の歴史や資料をみんなで共有し、活動自体はできなくても思いは繋がるかなと感じている。志多伯は8月4日(旧暦6月15日)に六月ウマチー(稲大祭)綱引きを予定しているが、たとえ中止でも簡単に決めるのではなく、地域の人々の心を繋げられるような取り組みを考えている。現在、字民から綱引きの古い写真を集めており、公民館に1ヶ月ほど展示して写真展を開催し、みんなで綱引き行事を振り返る機会にしたい。実際、芸能は大雨でも台風でも途絶えたことがなく、ロープを用いたり区長と副区長が二人だけで綱を引き合ってるのも見てきた。綱引きは字民にとって、地域の安寧や平和を保ってきた一つなので、それを大事にする気持ちを途絶えさせたくない。感染症対策のガイドラインに沿って「やらない」と決断するだけでなく、「やれなくて悔しい」という思いはどこから湧き起こるかももう一度振り返り、みんなの気持ちを来年まで持続させる取り組みを模索しているところだ。

小川：今は祭祀ができない分、資料収集するとともに改めてその芸能の意義を見つめ直す機会にもなっていると。非常にポジティブな話を聞いた。神獅子が4月に奉納された映像を5分ほど見てみたい。

(映像：志多伯獅子加那志演舞 無病息災悪疫退散願

<https://youtu.be/AxE9hqKrP80>)

小川：4月7日付の琉球新報の紙面でも、「コロナ終息願い野呂殿内で獅子加那志」と大きく取り上げられた。

神谷：思い切って出演を承諾してくれたメンバーに感謝している。いろいろな方々のコロナを早く終息させたいという思いが詰まった映像。コロナの経験を、今の時代だからこういう形で残せるのかもしれない。

小川：神獅子による奉納と、その日の午後に公民館で行われた(神獅子の)複製獅子、演舞が二回行われた。二つの意味合いは違うのか。

神谷：そうだ。野呂殿内(拝所)には多くの人は呼べないので、公民館での総会に集まる人たちの所に獅子が出向いたという形。神獅子は野呂殿内だけで演舞して、午後はその思いを複製獅子と共に共有したということ。

小川：そのような実施は、評議会にかけて決定となったのか。

神谷：保存会はあくまでも豊年祭の無い年をつなぐための組織。豊年祭は字の行事であり、その行事に使う神獅子を出して良いか否かは字が判断する。区長も初めての経験なので少し戸惑っていたが、皆さん理解してくれた。



志多伯の豊年祭で演じる神谷武史氏

小川：今年は戦後75年という節目だが、沖縄の芸能は危機的な状況下でも伝承されてきたという経緯がある。感染症以前から「継承」は課題であったと、仲村渠さんの語りにもあった。これからの芸能の活動について展望があれば聞か

せてほしい。

仲村：今年1年に関しては、オンラインを使った芸能祭を開催する方向で検討している。この1年何もできないということは無いようにしたいのと、青年会の活動を多くの人に広めるチャンスと捉え、この時代だからこそ出来る事をやる。また、いつでも帰ってこれる場所が地元だと思うので、地元の活動を無くさないこと。地域の皆が行事に参加しやすい地域づくりが必要になってくると思うし、その先頭に立てるのが青年会だと思う。青年会を通して、地域作りに若い人たちも参加できるような取り組みをしていきたい。また、動画配信など若い世代が目にするような機会を作り、多方面に発信していくことも重要だと感じている。



沖縄県青年団協議会会長の仲村渠辰治氏

小川：青年会のみなさんは10代から20代後半ぐらいまでの忙しい世代で、空いた時間でなんとか地域に貢献している。沖青協というネットワーク組織が字単位の活動を応援するというシステムが、このコロナ禍において促進されるのではないかと、話を聞いて思った。神谷さんからも、今後の地元の芸能活動の展望をあらためてお聞きしたい。

神谷：八重瀬町では、6月4日に「八重瀬町地域行事相談窓口」を開設し、地域の行事開催の有無や、予防対策の方法などを情報共有できるようにしている。担当者が直接各地域に電話をして状況の聞き取りをすると、地域から「行政がこうして地域の伝統行事を気にしてくれていることが嬉しかった」という声があった。実は、芸能や行事は、社会との関係がないとできないもの。コロナの経験は、これまでも周りの人

達にお世話になっていたことを実演家も知る機会になったし、周りの人たちにとっても、芸能が途絶える事で自分の心の拠り所が一つ減ったような寂しさを感じる機会にもなるだろう。これは決してマイナスではなく、みんながこの状況で何をやるか、マイナスをプラスに変える一つの出来事かなと感じている。時に首長が変わることや、予算の増減によって、町の文化事業の活動が不安定になることがある。「こういう状況ではこうする」というガイドラインのようなものを作ることや、町の方針として文化振興条例や基本計画を制定することが、まず文化活動をする住民や行政担当者の事業企画の源であり、ある意味で芸能活動の基盤になると思う。今、ブレない文化政策に行政がどれだけ意識を高めていけるかも、重要なポイントと感じている。例えば東風平中学校の芸能の授業では、水曜日の5と6校時に組踊、琉球舞踊、太鼓、三線、空手、地域の棒術を学んでいる。実践者である地域の人たちが、非常勤講師として雇用される。現在の時給は1500円で、町が予算をつけて雇用することで実演家がこれで生活できることも可能になると思し、それが20何年、町村が合併しても続いており、隣接する旧具志頭村の具志頭中学校も去年から始めた。郷土の芸能を授業に取り入れることで、団地や新興住宅に住んでいる学生や生徒も平等に芸能に触れる機会が得られ、早い段階で芸能に出会える。継承されてきた地域だけが伝統を守るのではなく、いかに新しい地域や住民も巻き込んでいけるような文化の環境を作るかという取り組みだ。今年は東風平中学校の組踊の授業も中止になったが、その授業が20年続けられてきた歩みをまとめる予定だ。

小川：お二人から、芸能の当事者の声を超えて、役場の取り組みや仕組みの部分なども含め、大きな示唆を与えていただいた。



オンライン座談会の様子

【質疑応答】

質問者：久万田 晋（沖縄支部）

お二人の話の中でもひしひしと感じたが、何十年と続けてきたことが今年は出来ないということは地域にとっては非常に大きなことで、地域と密接につながっている民俗芸能のようなものは一種のセーフティネットなのだろう。芸能を演ずることによって、祖先の霊などと交流し安堵感を得る。コロナ禍において、その心のセーフティネットができないとはどういうことか、それが及ぼす影響はどういう風になるのか、研究する立場の人間は考えなきゃいけない。また、エイサー祭りなど市町村のいろんなお祭りを中止することによるマイナスの波及効果について、行政も考える必要があるし、研究者もなんらかの方法でその把握に努めなくてはならない。仲村渠さんのお話にもあったように、今回中止にすることで、都合が悪くなったらやめていいという解釈を与えてしまうことにもなりかねない。若い世代にこの経験をどう伝え、どう立ち向かうのか、みんなで考えていかなければならないと思う。

仲村渠：本当におっしゃる通りで、こういう状況だからこそ簡単に中止を選択するのではなく、代替でもいいので何かを残しておく必要があると思う。自分で体験して語るということが重要でもあるので、そういうチャンスを無くしてはいけない。

質問者：荒木真歩（西日本支部）

先日、京都民俗学会において大規模祭礼を対象にしたコロナに関する議論があった。コロナの影響で祭礼が中止になったことで、お祭りの本来の意味から離れいかに観光利益を期待してきたか、また、保存会や連合会はあったものの中止の決定権を持つ明確な組織がなかったことも、露わになった。そういう意味で、八重瀬町志多伯の獅子舞は、保存会の方が評議会や区長にボトムアップ的に相談して行なったというのは、民俗芸能のような単単位でやってきたものの強みで、また離島県の沖縄だから可能かと思った。また、その地域の根本的な社会行動や基盤にある文化は、災害の影響でそんなに大きく変わるものなのか。コロナ前はどうかだったのかという長いスパンで、もう少し俯瞰的に見る必要性を感じている。もうひとつ、記録の重要性。志多伯では過去を振り返る写真展示の試みがあると聞いて、素晴らしいと思った。今この状況下でも記録をするということが非常に大事で、お二人のような当事者だからこそ記録できるという部分もあると思う。記録し、それを共有することが大切だろう。

小川：コロナがきっかけで今まであった問題が顕在化したのが、これを今後どうするのか。また、アーカイブの重要性についても指摘されていたと思う。

神谷：神獅子も終戦翌年の昭和21年には作られて、どうにか繋げてきている。地域も自分たちも、後継者不足に悩まされてきた。戦後の状況やスペイン風邪の流行といった苦しい時期と今の現状がはたして同じなのか。青年の人数や文化に対する取り組み状況が同じであれば、今回も乗り切れるかなと、少し安心につながるかもしれない。もう一点、担い手（キーマン）不足の問題。活動を支えるキーマンが育っていない。コロナで今年の祭りが中止になるというような？表面だけに今はとらわれていきそうだが、もう少し根元的な、マネジメントできるようなキーマンの育成も必要。

質問者：小西潤子（沖縄支部）

今日のお話を伺って、こういう危機的な状況になった時に私たちがその芸能のその根本的な意味を問い直す、そういう機会になったのかなと感じた。仲村渠さんの「せめて道ジュネーだけでも」という話からは、村々を回るといふエイサーの根本に目を向けられたということ、神谷さんの話からは、獅子舞は元々悪疫退散を祈願する意味もあったこと。都市祭礼の祇園祭りのような多くの人に見せることを目的とし発展してきた芸能と違って、村々の中で継がれてきたという、それこそ「足元」を、担い手自身も再認識されたのかなと思う。これから芸能を発展させていくという時に、ただ「見せる」ということだけではなく、芸能に対して地域の人たちが元々持っていた気持ち、心を伝えるという方向になっていくのではないかな。

小川：最後に。

神谷：外からの評価を地域の人たちはすごく喜ぶ。新聞に地域や個人の活動が掲載されると、みんなで称えあって喜ぶ。それぐらい、地域の人たちは自分たちがやってることが認められた時や、周囲の方に目を向けてもらった時、その感動や歓喜がまたエネルギーとなる。先生方が地域に出向いた際に一声かけて頂き、ぜひ激励していただきたい。

仲村渠：この機会に、先生方や他の団体とのつながりを持ってたら、私たちの活動の中でプラスに変えていけると思う。

（報告：長嶺亮子）

【WEB 座談会をおえて】

オンライン例会終了後、参加者からコメントをいくつか頂戴した。

☆ゲストのお二人の芸能と地元に対する愛がとても伝わってきた。今だからできること、今だから考えられることを模索して次へとつなげていこうという姿勢にとっても共感した。同じアプローチが、いろいろなことに当てはまると思った。（西日本支部会員）

☆厄払い祈願の獅子舞は吃驚した。こういうときだからこそ行った意味はととてもわかるが、ちょうどその直後に非常事態宣言が出され、すでにとってもピリピリしている時期だったので、マスクもつけず、皆で獅子の面をなでている様子など、こちらでは全く考えられない。その地域差にあらためてびっくりした。（東日本支部会員）

☆「1年何もしないわけにはいかない。」という決意表明は、そのために払われるであろう、たくさん時間や努力に対する覚悟が伝わってきた。私も自分のフィールドで今できることを真剣に頑張らなくてはと励ましてくれるメッセージともなった。（東日本支部会員）

☆ゲストのお二人の話を伺い、沖縄の文化の豊かさを感じた。ご本人たちにとっては当たり前のことかも知れないが、都会の人間はとうの昔に無くしてしまった祈りに対する神聖な感覚を、お2人から感じた。（西日本支部会員）

☆"ぬんどらんち"というものをどう思っているのか聞いてみたかった。（西日本支部会員）

神谷氏からの返答

「ぬんどらんち（野呂殿内）」に関しては、神谷氏から「志多伯では獅子屋（しーしやー）とも呼ばれ神獅子を奉ってある場所。私からすると『神獅子が奉られ、村の安寧を祈願する神聖な場所』だと思っている。野呂（神女）が住んでいたことや、その野呂殿内を番する「長嶺」という家が隣にあり、とにか

く村で大切に守ってきた場所だと思う。」との回答をいただいた。

☆課題への取り組みの時期や規模、方法等それぞれに違いがあり、新たなアイデアの源泉を得る事ができた。何より活動の根幹を成す、熱い想いに触れる事ができたのが有難い。

(クイチャーフェスティバル実行委員会・非会員)



オンライン座談会を視聴する

クイチャーフェスティバル実行委員会の皆さん

(宮古島からの参加)

(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.42 編集委員
遠藤美奈、小川恵祐、古謝麻耶子、
多和田真理、長嶺亮子
次号 No.43 は 2021 年 3 月に発行予定